

## 「このような時代にあって」

マルコの福音書 8:34~38

### はじめに

前回の箇所、イエシュアはご自分が十字架にかかれて死なれることを弟子たちにはっきりと告げられ、それを聞いたペテロがイエシュアをいさめたという出来事が記されていました。しかしイエシュアは彼を逆にお叱りになり「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と言われました。ここで「下がれ」と訳されているヘブル語スールには本来、その最初の言及である創世記 8:13 から「覆いを取り払い、新しい地を見る」というような意味合いがあることを述べました。つまりこの時のペテロの思い、考え方には敵であるサタンの「覆い」がかかっている、神のこと、神の御言葉を思うことができず、新しい地すなわちやがてこの地上に建てられる「神の国」を、そのご計画を見る、思うことができない状態であったということです。これはペテロ個人に関することというよりも、イエシュアが神の御子メシアであることを信じないイスラエルの民、ユダヤ人たちを表す「型」として見ることもできます。まさにこう記されているとおりです。

### コリント人への手紙Ⅱ【新改訳 2017】

3:14 しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読される時には、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるものだからです。

しかしこの覆いがかかっているのはイスラエルの子ら、ユダヤ人たちだけではありません。新しい地すなわち「神の国」を見るという点においては、私たち教会もまた様々な偽り、誤った情報、そして神を無視した人間的な尺度での考え方という形のサタンの覆いによって、神の御言葉に表されたそのご計画が見えなくなっています。私たちもまたこの時のペテロのように、サタンの覆いをスール、すなわち取り払う必要があります。しかしそれを私たち自身の力ですることはできません。メシアであるイエシュアによって、また御霊の働きによってのみそれを行うことができます。ですから今日の箇所も、イエシュアがメシアであることを思い、また御霊の助けと導きを求め、覆いが取り払われることを願いながら読み進んでまいりたいと思います。

### 1. 捨てる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:34 それから、群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」

ここでイエシュアは弟子たちだけでなく、群衆も呼び集められ、話をこう切り出されました。「だれでもわたしに従って来たければ…」と。ここには「欲する、喜ぶ」という意味のハーフェーツ(צוה)というヘブル語が使われており、「だれでもわたしに」イエシュアに従うことを「欲する、求めるならば…」と訳すこともできます。このハーフェーツの最初の言及は創世記 34:19 です。

創世記【新改訳 2017】

- 34:15 …もし、あなたがたの男たちがみな、割礼を受けて、私たちと同じようになるなら、  
34:16 私たちの娘たちをあなたがたに嫁がせ、あなたがたの娘たちを妻に迎えましょう。そうして私たちはともに住み、一つの民となりましょう。  
34:17 しかし、もし、あなたがたが私たちの言うことを聞かず、割礼を受けないなら、私たちは娘を連れてここを去ります。」  
34:18 彼らの言ったことは、ハモルと、ハモルの子シェケムの心になかった。  
34:19 この若者は、ためらわずにそれを実行した。彼はヤコブの娘を愛していたからである。

これはヤコブ（すなわちイスラエル）の息子たちがヒビ人すなわち異邦人のシェケムという男に言った言葉です。シェケムはヤコブの娘ディナに結婚を申し込みましたが、その時ヤコブの息子たちは彼に「割礼を受け」させ、「ともに住み、一つの民と」なることを条件として提示しました。これをシェケムは快諾します。それは「彼はヤコブの娘を愛していたからである」とあり、「愛していた」ここに聖書で最初のハーフェーツがあります。ですからこのハーフェーツとは本来、異邦人がイスラエルの民に繋がる、一つの民になることを求める、欲する、喜びとするという意味があると考えられます。ですからイエシュアが言われた「わたしに従って来たければ」とは、ただイエシュアについて行く、聞き従うという者となることだけでなく、イスラエルは異邦人を受け入れ、また異邦人はイスラエルに結びつくという神のご計画が指し示されており、これを求める者、喜び受け入れる者を指してイエシュアは語っておられるのだと考えられます。そしてこの神のご計画を欲する者とは誰か、どのような者のことであるかということが次に記されています。

「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」とあるように、それはまず「自分を捨て」る者のことであるとイエシュアは語っておられます。ここには「否定する」という意味のカーハシュ(שָׁחַח)という言葉が使われています。この最初の言及は創世記 18:15 です。

創世記【新改訳 2017】

- 18:12 サラは心の中で笑って、こう言った。「年老いてしまったこの私に、何の楽しみがあるでしょう。それに主人も年寄りです。」  
18:13 【主】はアブラハムに言われた。「なぜサラは笑って、『私は本当に子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに』と言うのか。」  
18:14 【主】にとって不可能なことがあるだろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子が生まれている。」  
18:15 サラは打ち消して言った。「私は笑っていません。」恐ろしかったのである。しかし、主は言われた。「いや、確かにあなたは笑った。」

これは神である主が、アブラハムの年老いた妻サラが子（イサク）を産むことを予告された場面ですが、サラはそれが信じられず「心の中で笑っ」たとあります。しかし彼女は「恐ろし」くなり、笑った事実を「打ち消して言った」とあり、ここに聖書で最初のカーハシュが使われています。このようにカーハシュとは本来、神の定められた出来事、神のご計画を笑う、つまり信じない、否定する、ということ打ち消

す、否定するという、まるで二重否定のような意味を持った言葉であると考えられ、イスラエルの民の姿がこれに当てはまります。すなわち彼らは初臨のイエシュアは否定して十字架にかけて殺しますが、再臨のイエシュアについては、かつての自分たちの取った行為を否定し、イエシュアを恐れ、メシアとして認めるようになるという神のご計画が、このカーハシュには表されているということです。ですからイエシュアの言われた「**自分を捨て**」る者とは、**イエシュアが地上再臨される際にこれを神の御子メシアとして認める、受け入れるイスラエルの民、ユダヤ人たちのこと**であると考えられます。しかしこれはイスラエルだけでなく、私たち教会の姿をも指し示していると言えます。なぜなら私たち教会はみな、かつては神を知らない、イエシュアを信じない者、神を否定する者であったからです。そんな自分を否定し、すなわち罪を悔い改めて私たちは教会に加えられました。ですから「**自分を捨て**」る者とは、**今イエシュアをメシアとして信じている私たち教会のこと**であるとも言えます。

## 2. 十字架を負う

そしてまたイエシュアは、ご自分に従って来る者とは「**自分の十字架を負**」う者のことでもあるといわれました。「**十字架**」ヘブル語でツエラーヴ(צֶלֶב)というこの言葉は、実は旧約聖書にはありません。それは私たち教会の中では信仰の中心となっているこのイエシュアの十字架の死と復活の事実が、旧約聖書しか認めないイスラエルの民、ユダヤ人たちの目には隠されているためです。これこそがまさに今日の最初に述べた、やがて取り払われるべきサタンの覆いです。この覆いのゆえに彼らは初臨のイエシュアを十字架にかけて殺してしまったのです。またこのツエラーヴは「陰(影)」という意味のツェール(צֶל)との結びつきが考えられ、まさにユダヤ人たちの目にはイエシュア十字架が、「陰」に隠れて見えないことが表されていると考えられます。ちなみにこのツェール「陰(影)」という意味の言葉は本来、このような出来事で使われました。

### 創世記【新改訳 2017】

19:1 その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

19:2 そして言った。「ご主人がた。どうか、このしもべの家に立ち寄り、足を洗って、お泊まりください。そして、朝早く旅を続けてください。」すると彼らは言った。「いや、私たちは広場に泊まろう。」

19:3 しかし、ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。ロトは種なしパンを焼き、彼らのためにごちそうを作った。こうして彼らは食事をした。

19:4 彼らが床につかないうちに、その町の男たち、ソドムの男たちが若い者から年寄りまで、その家を取り囲んだ。すべての人が町の隔々からやって来た。

19:5 そして、ロトに向かって叫んだ。「今夜おまえのところにやって来た、あの男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいのだ。」

19:6 ロトは戸口にいる彼らのところへ出て行き、自分の背後の戸を閉めた。

19:7 そして言った。「兄弟たちよ、どうか悪いことはしないでください。」

19:8 お願いですから。私には、まだ男を知らない娘が二人います。娘たちをあなたがたのところに連れて来ますから、好きなようにしてください。けれども、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは、私の屋根の**下**に身を寄せたのですから。」

神はソドムの町に行かれました。それは罪に満ちたこの町を滅ぼすためでしたが、ロトとその家族だけは救おうとしておられました。そんな神を求め、「しきりに」熱心になって神を自分の家の「屋根の下に」迎え入れ、心からもてなしたロトの姿がここには描かれており、ここに聖書で最初のツェールが使われています。結果的に彼とその家族は滅びを免れました。ですからこの言葉には本来、**神である主を受け入れ、滅びを免れる者たちの家という意味合いがある**と考えられます。日本語の「陰（影）」という言葉はどちらかと言うと暗いイメージで、あまり好ましい言葉ではありません。もちろんヘブル語のツェールにも「死の陰」「影のように飛び去る」など否定的な用いられ方もあるのですが、多くの場合ツェールは守り、避け所のような意味を持っています。昔から灼熱の強い日差しが降り注ぐイスラエル地方一帯では、陰はただの涼しい場所ではなく、命を守る場所、重要な避難所でした。40年も荒野を旅したイスラエルの民は、この陰のありがたさをどの民よりも強く感じていたことでしょう。旧約聖書においても、特に詩篇ではこれを神の守り、助け、主のみそば近くにあることを表す言葉として多く用いられています。

#### 詩篇【新改訳 2017】

17:8 瞳のように私を守り御翼の陰にかくまってください。

36:7 神よあなたの恵みはなんと尊いことでしょう。人の子らは御翼の陰に身を避けます。

57:1 私をあわれんでください。神よ。私をあわれんでください。私のたましいはあなたに身を避けていますから。私は滅びが過ぎ去るまで御翼の陰に身を避けます。

61:4 私はあなたの幕屋にいつまでも住み御翼の陰に身を避けます。

63:7 まことにあなたは私の助けでした。御翼の陰で私は喜び歌います。

91:1 いと高き方の隠れ場に住む者 その人は全能者の陰に宿る。

121:5 【主】はあなたを守る方。【主】はあなたの右手をおおう陰。

そしてさらにこのツェールに、「家、家族、国、国民」を表すヘブル文字であるベート(ב)が付け加えられた言葉がツェラーヴ(בֵּית)「十字架」という言葉なのです。このように、イエシュアのツェラーヴ「十字架」には、神の守り、救いを得るための場所としての家、国すなわち「神の国」についてご計画が表されている、いや秘められている、まさに陰に隠されていると言えます。ですからイエシュアの言われた「**自分の十字架を負う**」者とは、「**神の国**」を、**そのご計画を信じ、受け入れ、また神に受け入れられ、やがてそこに迎え入れられる者、神のみそば近くで守られる者のこと**であると考えられます。

### 3. パラレリズム

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。

「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い…」とはどういう意味でしょうか。私は長い間この御言葉は、自分自身の力で自分を救おうとする者、すなわち神に信頼しない者のことで、そのような者は滅びるという意味だと捉えていました。しかしそのような解釈では前後の文脈とどううまく結びつかないの

です。そして何よりここにも前節の「**だれでもわたしに従って来なければ、**」という箇所が使われていた「欲する、喜ぶ」という意味で、本来はイスラエルに結びつく異邦人を指し示す言葉であると先ほど述べたハーフェーツが使われているのです。ですからこの「**自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い**」とは、前節の「**だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、**」という御言葉を言い換えて強調した同じ内容のメッセージであると考えられます。つまり「**自分のいのちを救おうと思う（欲する）者**」は「**だれでもわたしに**」イエシュアに従って行くことを「欲する、喜ぶ」者となり、「**自分を捨て**」「**それを失**」う者とならなければならない、ということが二つの文章に分けられて記されている、語られていると考えられます。そしてこの二つのメッセージ「**だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、**」と「**自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い**」がハーフェーツという言葉で結ばれており、ここにイスラエルの民と私たち教会を一つに結ぶという神のご計画の「型」があると言えます。

このように解釈するならば、次の「**わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救う**」という御言葉もまた、前節とのつながりで見ることがあります。つまり前節の「**自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**」という御言葉を言い換えて強調したものであると考えられます。ここで少し注意する必要があります。「**自分の十字架**」と聞くと多くの人が、これを自分自身に与えられている使命や責任、働き、あるいは自分の罪であると捉えてしまうことがあるということです。しかしこれは大きな間違いです。聖書が指し示す十字架はイエシュアの十字架ただ一つであり、十字架にかかれた御方はイエシュアただお一人です。イエシュアはすべての人が背負うべき十字架を、その身代わりとなってお一人で背負われたのです。イエシュアが十字架にかかれ、私たちの身代わりとなって確かに死んでくださったのに、なおまだ私たちが背負わなければならない、かからなければならない十字架があるとしたら、イエシュアの十字架は不十分で不完全なものであったということになります。そんなことは断じてあり得ません。ですからこの「**自分の十字架**」とは、**私たち一人ひとりに与えられるイエシュアの十字架による贖い、罪の赦し、救いのこと**を意味します。決して誤解のないようにしてください。ですから「**自分の十字架を負って**」くださった御方とはイエシュアご自身です。それは信じるすべての人の罪の贖いのためというだけでなく、イエシュアご自身が栄光をお受けになるためであり、また福音とも呼ばれる聖書に記された神のご計画が成就するためでもありました。それはまさに「**わたしと福音のためにいのちを失う**」という行為であったのです。

このように、「**だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。**」と「**自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。**」というこの二節はパラレリズム、同じ内容のメッセージを言い方や表現を換えて繰り返し、これを強調しているものであると考えられます。そしてこれをヘブル語の視点で捉えるならば、イエシュアによってイスラエルの民と私たち教会が一つに結ばれることによって完成する「神の国」のご計画が表されていると考えられます。イエシュアはこの御言葉を「**群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた。**」とも記されています。この事実も単なる状況説明などではなく、「**群衆を弟子たち**」をイスラエルと教会にたとえた「型」であると考えられます。つまりここには「神の国」についてのご計画が三度も繰り返して表されているということになります。このようにして見るならば、聖書が、神がいかに「神の国」を強調しておられるかということがおわかりいただけるでしょうか。

#### 4. 差し出す

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:36 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら、何の益があるでしょうか。

8:37 自分のいのちを買い戻すのに、人はいったい何を差し出せばよいのでしょうか。

ここにも「自分のいのちを失ったら」と、先ほどと同じような表現がありますが、ここに使われているヘブル語はシャーハト(תהט)と言い、本来は「神の前に墮落する」という意味で使われた言葉です(創世記 6:11)。また「何の益があるでしょうか」という、ここにはサーハン(קצח)、口バがその主人を乗せて歩くように「忠実に仕える」という意味の言葉です(民数記 22:30)。つまり「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら、何の益があるでしょうか。」とは、**罪にあふれ墮落してしまった今の世では、人は神に仕えることができるだろうか(いや決してできない)**、という意味にも受け取ることができると考えられます。そして今の世を「**買い戻すのに、人はいったい何を差し出せばよいのでしょうか。**」という、人の側には差し出せるものなどありません。しかし神の側にはそれがありました。それはもちろん神の御子メシアであるイエシュアです。神はこの御方を「**差し出**」してくださいました。ここで「差し出す」という意味で使われているナータン(נתן)、これは本来、地上を照らし、治める存在を「置く」という意味で使われました。

創世記【新改訳 2017】

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼を治めさせ、小さいほうの光る物には夜を治めさせた。また星も造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地の上を照らさせ、

1:18 また昼と夜を治めさせ、光と闇を分けるようにされた。神はそれを良しと見られた。

神の側から「**差し出**」されたもの、それは「地の上を照らさせ」、「治めさせ」る存在としての王なるメシア、イエシュアです。この御方が王となって治められるならば、もはや地上が墮落することはありません。世は、人は神の御前に正しく仕えることができるようになります。それが「神の国」の完成です。このように、この箇所には、イエシュアによって統治される地上という形での「神の国」の姿が表されていると考えられます。

#### 5. 恥じる

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:38 だれでも、このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」

やがてイエシュアは、先ほど読みましたソドムの町のような今のこの「**姦淫と罪の時代に**」、それを終わらせるために「**父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来**」られます。そしてこのイエシュアの再臨を、神の御言葉を救い、福音としてではなく、呪い、滅びとしての側面で受け取らなければならない者

がいます。光と闇、祝福と呪い、命と死、救いと滅び、神のご計画にはまったく相反する二つの側面があります。イエシュアが「父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき」それが完全に表されます。「わたしとわたしのことばを恥じる」また「その人を恥じます」という箇所には「汚名、恥辱」という意味のヘルッパ(הַלְפָּא)という言葉が使われています。この最初の言及は創世記 30:23 です。

#### 創世記【新改訳 2017】

30:22 神はラケルに心を留められた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた。

30:23 彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言った。

これはヤコブ(すなわちイスラエル)の妻ラケルについてのものです。彼女は不妊の女でした。当時不妊の女は、神に呪われた女と言われていました。神は彼女の願いを聞かれ、その「**汚名**」ヘルッパを「**取り去ってくださった**」とありますが、これは意識で、直訳では「**汚名を集めてくださった**」となります。またこのヘルッパはハーラフ(הָרַף)という動詞がその語源なのですが、この本来の意味はなんと「婚約する(レビ記 19:20)」となります。ですからこのイエシュアとその「**のことばを恥じる**」「**その人**」とは、「**このような姦淫と罪の時代にあつて**」もなお、**イエシュアとその御言葉を信じ、受け入れたために、世の人々から憎まれ、イエシュアとその御言葉のゆえに「汚名、恥辱」を受ける人のこと**を指しているとも考えられます。しかしイエシュアは「**父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき**」、婚約者として選んでおられる「**その人**」をこの地上から「**取り去ってくださ**」ること、すなわち教会を携挙してくださるということ、また「**集めてくださる**こと」すなわち地上に再臨されイスラエルの民をご自分のものに集められるという、神のご計画が表されている御言葉とも考えることができます。

このように、「**だれでも、このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。**」という御言葉は、一見すると私たち教会にとっても何か不安にさせられるようなものに感じられますが、これをヘブル語の最初の言及の視点で見ると、「**このような姦淫と罪の時代にあつて**」も、メシアなるイエシュアの花嫁として生きる信仰と希望が与えられる福音とも見る事ができるのです。ですから…

#### ヨハネの福音書【新改訳 2017】

14:1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

やがて「**このような姦淫と罪の時代**」から、天の父の家に引き上げてくださるイエシュアが「**父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき**」を、その日を思いめぐらし、これを唯一の希望として目を留め、待ち望みつつ歩んでまいりましょう。御霊の助けが豊かにありますように。